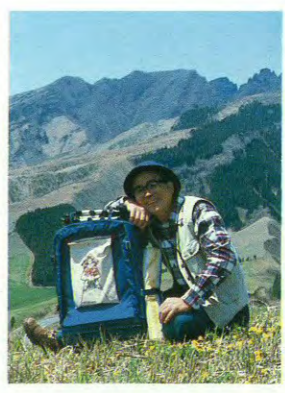


# 私に反省を せまった 阿蘇の大自然。



「阿蘇の自然と文化を守る会」  
常任理事 佐藤 武之

十七年前、定年で職を辞してから阿蘇へ帰り、ゆっくり腰を据えて故郷を見直し始めました。  
そして一番驚いたことは、知り尽くしていたはずの阿蘇を、実は何も分っていなかったということでした。自然界、とりわけ動植物についての知識は無に等しいものでした。  
「ここにいますよ。」と優しく微笑みかける野の花。「おい、やかましいぞ。」と冗談を飛ばしたくなるほど



盛んに歌を聞かせてくれる小鳥たち。「さあ、どうぞ。」とカメラにポーズをとる蝶など、その名前すら一つも分りませんでした。  
私が「住民登録」と称して、この野山の友達にカメラを向けるようになったのも、そのような無知に対する恥しさと申し分けなさからでした。  
そんなある日、「私に遠い祖先があるように、ひっそりと咲くこの花にも遠い祖先があったのだ。それが同じ阿蘇の風土の中で、お互いに生命を伝えてきたもの同志として、今ふとめぐり会ったのだ。」と気付きました。  
「そうだ、君は私と同じ故郷の住民だったのだ。同胞だったんだね!」と思った時、涙の出るような感動と、いとおしさが私の心を貫きました。それ以来、私の故郷を見る目が一変しました。

阿蘇の生きとし生けるものへの思いは勿論、阿蘇にまつわる神話や伝説祭りなど、すべて歴史の奥深くに埋没してしまっていた古代ロマンへ、私の夢は果てしなく広がりました。  
この度、阿蘇町の虎舞が初めて海を越えてハワイへ行ったと聞きます。

この舞いは、火を噴く山を畏敬し、阿蘇開拓の神、健甕龍命以来農耕に励んできた阿蘇の農民の暮らしの中から、自然に生まれた神人楽の民俗芸能です。  
厳しい自然環境にめげず、温かな人の心で、ユーモラスな表現を交えたこの虎舞は、同じような火の山の島で、農耕を軸として成長を遂げたハワイの人々に、きつと深い共感を与えたことでしょう。

成川の虎舞(阿蘇郡阿蘇町)  
古くは阿蘇谷全域に及んだ虎舞で、竹原、蔵原、折戸、狩尾、永草にも伝承されている。本来は獅子舞であるが、阿蘇神社の獅子舞に遠慮して虎舞と称したといわれる。成川の虎舞は、一頭の獅子と太鼓、笛、三味線、響の囃方と、六人の踊り子(娘で構成される。玉振りが持つ玉を、獅子がじゃれながら飲み込み、それを、白扇を持つ娘たちが両側からあやす「玉取り」や、娘たちが扇を帯にさし、木製の鏡と歌を持って壁塗りの様を見せる「壁塗り」があり、ほかに「アハ」「十禅寺」の四曲がある。  
この芸能は、前年の豊作を祝い、来る年の豊作を祈願して、家々の庭先で行われるもので、本県を代表する正月芸能の一つである。



## 心のふるさと民話とわたし

# 「医者どんと山法師と軽業師」

このお話を読んで、普通の話とは少し違うところに気付きました。それは、普通の話ならば一人の主人公にいろいろな事がおこって話が進んでいくのですが、このお話は三人の主人公がいて、それぞれが自分の特徴をそれぞれ活かしてゆく、というところです。

また、それがおもしろいところでもありません。まず、山法師が地獄のかまの湯を冷ます。次に医者か鬼の腹の中ですじを教える。そして、軽業師が二人をかかえて針の山をこえる。  
特に、三人で鬼の腹の中にある笑いすじ、泣きすじ、おこりすじを引くところが楽しかったです。その時の鬼のかっこうを、できるものなら見てみたいと思いました。

最後に、三人とも極楽に行きついたので、悪い事をしてきた者が極楽に行くのはちょっと問題ですね。  
私が住んでいるこの御船町にも、こんなに楽しい昔話があったなんて初めて知りました。



●感想文  
御船中学校1年  
増住 香織

●感想文  
木倉小学校6年  
田上 英子

「医者どんと山法師と軽業師」  
あらし  
むかし、御船のあるところに、医者どんと山法師と軽業師が住んでいた。ところが、三人とも同じ日の同じ時刻に死んでしまった。  
冥土でえんま大王の前に通された三人は、生前悪いことをしたということ、早速、湯がぐらぐら煮え立っている地獄の釜の前に引っぱられて行った。その時山法師は何か訳のわからない呪いの文句を唱え始めた。すると、不思議なことに丁度よい湯かげんになり、三人は気持ちよそうに湯に入っている。  
えんま大王は驚いて、  
「今度は、地獄いちばんの大鬼に食べてしまえ。」

大鬼が医者どんを食おうとして大きな口をあけた時、医者どんは歯の欠けた薬を鬼の歯ぐき一面に塗り付けた。大きな歯がぼろぼろに欠けた大鬼は、仕方なく三人を次々に丸のみにしてしまった。  
医者どんは、鬼の腹の中で泣き筋、笑い筋、怒り筋の三本の筋を捜し出し、三人で次々に手当たり次第に引っ張った。大鬼は、わあわあ泣き叫んだり、わっはっはと笑いこけたり、ぶんぶん怒って暴れ出したりして、とうとう三人とも吐き出してしまった。

次は、剣の山。軽業師は、右の肩に医者どん、左の肩に山法師を乗せ、ひよいひよいと剣の山を乗り越えて行った。  
そして、三人の目の前に広がったのは、池のほとりに蓮の花が咲きみだれ、夢みるような美しい音楽が流れている極楽浄土であった。